

サビエル生誕五百年

巡礼の道

196

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

親ばか上京記(上)

卒業式、入学式の季節である。ベトナム紀行の途中であるが、娘の卒業について書く親ばか・身勝手をお許しいただきたい。

長女が八年かけて大学院を修了し、学位を授与されるというので妻と二人で上京した。娘が公務員(保健師)を六年で辞め、NGO活動でパレスチナに赴任したのは一九九五年のことである。

決に向かうと期待され、貧しい母子の保健プロジェクトの一員として現地で七年間働いた。しかし紛争状態は好転せず今も続いている。このため二〇〇二年に帰国、保健学を再び学ぶため東京大学大学院に入学した。同時に日本国際ボランティアセンター(JVC)のパレスチナ担当として働くことになり、二足のわらじを履くことになった。

最短なら五年間であるが、修士課程三年、博士課程五年をかけた「保健学博士」の学位が授与された。博士論文のテーマは「占領地パレスチナ・ヨルダン川西岸地区において、紛争・経済的要因が出産場所に及ぼした影響」である。印刷したものの一冊プレゼントされたが、英語で書かれているので内容は全くわからない。授業も英語だったというから驚く。卒業式に出席してもびっくりするほどの連続であった。

東大の卒業式は二日間に四回行われた。一日目は大学院で、卒業式とは言わず、学位記授与式。理系と文系に分けて開かれる。そうしないと安田講堂に全員が入れないからである。

修士課程修了者は二千九百四十七人。博士課程修了者は八百四十七人で、うち女性は百八十八人、留学生は百二十四人。二日目は大学の卒業式で、卒業者は三千五百七十七人。合わせると七千三百七十一人になり、その数の多さにも驚く。

東大安田講堂と言えど、大学紛争の象徴的存在であり、そこに入るのを楽しみに上京したのだが、入れるのは学



大学院の学位記授与式

生だけ。父母や教職員は別会場でTVで中継されるのを見たのである。

二日間ともあいにくの雨模様。しかし生涯に一度の晴れ姿、大学院の場合はほとんどの者が角帽をかぶり、ガウンを着ていたが、その姿には伝統と歴史を感じさせられた。

娘も私たちが上京するということで貸衣装でガウンを着用した。費用は一万円。式典のあと学生証と引き換えに学位証を渡されたが、開口一番「これでJRの学割が使えなくなつた」とは儉約家の娘ら

しい言葉である。他人には寛大で、自分分はつましく生活し、支援しているパレスチナをテーマに、働しながら学位を取得した娘を私たちに預けてくださった神に感謝あるのみ。

敷地内の生協やコンビニエンスストアでは東大グッズのまんじゅうやクッキーなどの菓子、ボールペンなどの学用品が飛ぶように売られていた。この原稿もそのボールペンで書いているが、少しは効果があったであろうか。(元山口放送取締役ラジオ局長)



東大安田講堂前